

大川小学校（石巻市）で何が起こったにか

2月25日、語り部の人の案内で、大川小学校を見学する機会がありました。

東日本大震災において、小中学校の学校管理下で生徒が犠牲になったのは、大川小学校だけ。他の小中学校では、犠牲者は出ませんでした。一方、大川小学校では、親達が連れて帰った生徒の犠牲は0人です。一方、宮城県では、親達が学校から連れて帰って津波の犠牲になった生徒は約130人です。また、大川小学校では、犠牲になった生徒の祖父母の多くが犠牲になりました。孫たちが家へ帰ってくるのを待っていて、避難しなかったからです。

大津波が来るというので、防災無線が警報を鳴らして、消防団や市の防災車も、大川小学校の前を通過して、高台への避難を呼びかけました。大川小学校は、北上川の河口から約3.7km上流にあります。大津波は北上川を遡って、新北上大橋の約1/4を破壊して、下流の大川小学校を襲いました。その時の津波の高さは、約8.6mです。大地震から津波の到達時間までは約51分。教職員や生徒は50分間校庭で待機をしていて、川の堤防に向かって避難を開始して1分で津波に襲われました。

校庭の体育館の隣には、小さい山がありました。シイタケ栽培の体験学習もそこで行われていました。「先生、津波が来るから山へ登ろう」と言った6年生に対して、「津波なんか来ない」と教師が怒りました。また、一人だけ山へ逃げて助かった教師がいます。避難所でも、自分が教師であることを一切隠していました。1人助かった教師は、自身のPSDを口実にして、その後一回も公の場で証言を拒否しています。

警察・消防・自衛隊が救助に来たのは、約1週間後です。水道も電気も止まりました。父兄や地区の人達が、子どもの遺体の捜査活動をしました。冷たい泥水の中から、子どもの手足を見つけると「〇〇ちゃんの遺体が見つかった」と肩を抱き合せて喜んだとのこと（遺体を早く泥水の中から出してあげたくて）。しかし、見つかった遺体は家へ連れては帰れません。川原にビニールシートでくるんで並べられました。遺体は軽トラックで4列に並べて、安置所まで搬送されました。遺体は途中で、軽トラックからトラックに移し替えられました。トラックの荷台に重なった遺体を遺族には見せないための配慮からでした。火葬場は一杯だったので、応急的に土葬にされました。生き残った祖父は、墓を掘りながら、「何で自分が孫と代わってやれなかったのか」と自責の念に駆られたそうです。

遺族達の多くは、最初は大川小学校を震災遺構として残すことに反対でした。校舎を見ると子供のことを思い出してしまうからです。しかし、9年が経過して、大川小学校の悲劇は、自分たちだけの問題ではない、将来の防災教育のためにも、保存してもらいたい、という思いに代わっていきました。兵庫県は、毎年新任教師の研修で、大川小学校を訪問します（阪神淡路大震災の経験もあって防災教育に熱心）。一方、地

元の宮城県は、新任教師の研修は大川小学校では一度も行っていません。教師は4年ぐらいで異動します。教師の間でも、防災教育の風化が進んでいます。



【大川小学校一直ぐ傍の小山から撮影（石巻市）】



【大川小学校一中庭から（石巻市）】

映画「Fukushima50」、ぜひ見てください。お勧めです！